

ジャンボ渡辺の学

富士山学

皆さんは、富士山のトイレ事情をご存じでしょうか。登山者は50年以上、山小屋内に設置されているためこみ式の簡易トイレを使用してきました。夏山シーズンが終わると、便槽にたまったし尿を地表に排出します。周囲に悪臭を放ち、環境や景観に悪影響を及ぼしてきました。今でもこの痕跡が「白い川」となり、富士山の山肌を醜くへばり付いています。

トイレの処理、費用は

登山者だけの負担、限界



渡辺豊博さん

「環境配慮型トイレ」の整備が始まりました。06年には山梨県側18カ所、静岡県側24カ所すべての山小屋に、計49基

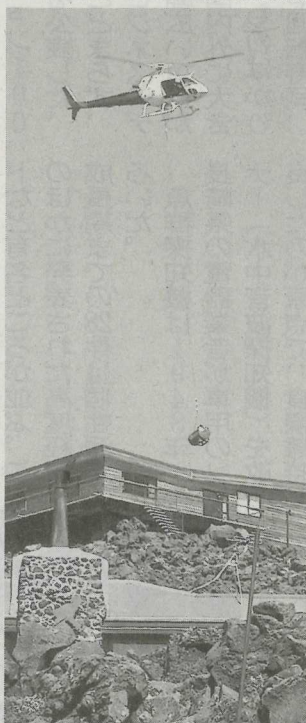
のバイオトイレが設置されました。処理方式は、オガクズが多く、カキ殻浄化循環、燃焼式、杉チップ式などがあります。

しかし、多くの課題を抱えています。トイレ使用料はチップ制ですが、支払ってくれるのは利用者の半分以下で

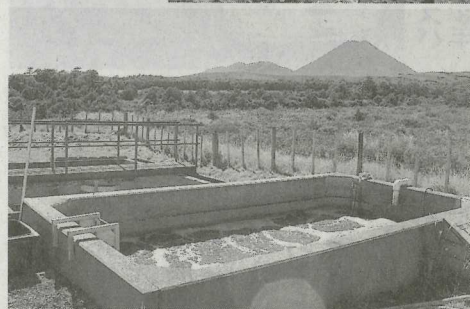
す。維持管理費が補えていません。また、機能的にも、使うに従って処理能力が低下することや、保守点検の難しさ、交換が必要な廃棄物の処理に高額な回収費用がかかること、などの課題を抱えています。

私は3月下旬、ニュージールランドのトンガリロ国立公園を訪れました。山小屋やロッジのトイレは、すべて「コンポスト方式」になっています。汚物を微生物に発酵・分解させる仕組みですが、容量が満タン近くになるとヘリコプターで搬出し、国立公園の近くの下水処理場で浄化処理していました。ヘリコプターの経費は1時間で20万円ほど。高額の費用がかかりますが、多様な資金確保の仕組みでカバーしていました。そのひとつが公園内で営業する観光業者への「課税」です。売り上げに対してスキー場では15%、ホテル・ゴルフ場では6%の納付義務を課しています。さらにスキー場には、

国有地の利用税として売り上げの10%を重複課税していました。また、地元のNPOは、企業や個人から年間3千万円近い寄付金を集めて国立公園に資金提供しています。環境保全やマオリ族の文化・伝統の継承を計るためです。世界遺産登録や自然環境のおかげで収入がアップした観光業者へ課税負担させることで、高額な維持管理費をまかなっています。国民に寄付を仰ぎ、国民総参加の仕組みも作っています。富士山のように、登山者だけに負担を募る「入山料」の仕組みはありません。



① ニュージールランド・トンガリロ国立公園で、搬出される山小屋のトイレ汚物。分解処理は公園近くの下水処理場で行う② 同国立公園の下水処理場。山小屋のトイレ汚物が処理される。後方は富士山に似た形のナウルホエ山。いずれも筆者提供



世界遺産として、開発の抑止と過度な利用の低減が求められています。富士山では今、登山者の制限とトイレ環境の整備が緊急の課題です。

わたなべ・とよひろ
都留文科大教授